

## 現代英語における譲歩を表す前置詞 —コーパスに基づいた通時的・共時の研究—

菊地 翔太\*

東京大学大学院 総合文化研究科 言語情報科学専攻 博士課程

(Received 30 November 2013; Final version received 20 February 2014)

This paper provides a corpus-based investigation of concessive prepositions in Present-day English from a synchronic and diachronic perspective. It reveals that, in general, *despite* increased dramatically in frequency at the expense of *in spite of* in the first half of the twentieth century and was established as the most frequent concessive preposition in the latter half of the century. This change seems to have taken place earlier in American English than in British English. A close look at the situation from a register perspective suggests that the increased use of *despite* has spread from print journalism, where the compactness of the form may be much appreciated. Although it was considered by some to be formal, *despite* is now not uncommon in spoken English. Though it has been losing currency in Present-day English, *in spite of* is still relatively frequently used when the object is a reflexive pronoun.

本稿では現代英語における譲歩を表す前置詞の使用状況を、様々なコーパスを用いて、通時的・共時的な視点から調査した。*despite* は 20 世紀前半に急速に発達し、20 世紀の後半には *in spite of* を凌ぎ最も頻度の高い形態になっていることが判明した。この変化はイギリス英語よりも早い段階でアメリカ英語で広まり、発達初期の段階では新聞や雑誌でとりわけ好まれていたことが明らかになった。簡潔さが重んじられるジャーナリズムの英語で重用されていたことから、*despite* の発達の背後には形態の簡潔さが関係していると推測される。*despite* は文語的であると言われることがあるが、現代英語では話し言葉においても最も一般的に使用される譲歩の前置詞であった。*despite* は様々な使用域・用法で着実に勢力を拡大しているようであったが、再帰代名詞の目的語としては *in spite of* と拮抗関係にあることが判明した。

### 1 はじめに

本論では、「...にもかかわらず」の意味で使われる譲歩の前置詞 *despite*, *notwithstanding* と群前置詞 *in spite of* の現代英語における使用状況を調査する。次節で詳しく見るように、現代英語における譲歩の前置詞を調査した先行研究はいくつかあり、これらの語句の頻度に変化が見られることを明らかにしている。しかし、具体的にいつ頃に大きな変化が起こったのか、どのような使用域から変化が進行し

---

\*Email: shota.kikuchi21@gmail.com

たのか、21 世紀に入ってから使用状況はどのようなになっているのか等の疑問点を残している。そこで本論では、様々な通時的・共時的コーパスを用いて譲歩の前置詞の使用頻度の歴史的変遷を調査することで、これまでの研究で不透明であった変化の詳細を明らかにし、現代英語における使用状況を浮き彫りにする。最後に、本論の調査結果を基に英語教育への示唆を提示する。

## 2 先行研究

OED によると、「...にもかかわらず」の意味で使われる前置詞 *despite* と群前置詞 *in spite of* は、中英語期 (1100-1500) に古フランス語の ‘*en despit de*’ (「...を軽蔑して」の意) の翻訳借用語句として現れる ‘*in despit of*’ という前置詞に由来する。*despite* は *in despite of* から *in* と *of* が取れた形であり (*in despite of* → *despite of* → *despite*)、*in spite of* は *in despite of* の *despite* の *de* が消失してできた形態である (*in despite of* → *in spite of*)。意味は本来の「...を軽蔑して」から「...を無視して」へ、そして最終的には今日の「...にもかかわらず」へと変化している。14 世後半が初出の *notwithstanding* は、本来語から構成された複合語であるが (*not* + *withstanding*)、ラテン語の *non obstande* に対応するフランス語の *non obstant* に倣って作られた語である。

Rissanen (2002) は様々な史的コーパスを用いて譲歩の前置詞の歴史的発達を調査している。*Helsinki Corpus* を始めとする 19 世紀以前の歴史的資料をカバーするコーパスを調査した結果、18 世紀までは *notwithstanding* が圧倒的に優勢であったことが明らかになった<sup>1</sup>。A Representative Corpus of Early English Registers (ARCHER) のデータによると、18 世紀後半に *in spite of* が増加し、19 世紀後半から 20 世紀にかけて (*in*) *despite* (*of*) が発達したと考えられる。Rissanen (2002: 200) における ARCHER の調査結果を以下のグラフ (図 1) に示す。

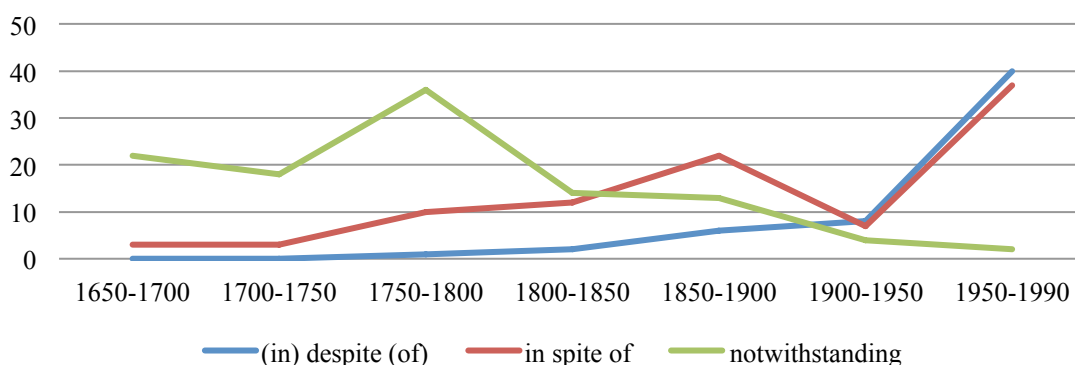


図 1. ARCHER (1650-1990) における譲歩の前置詞 (絶対数) (Rissanen (2002: 200) を基に作成)

<sup>1</sup> Helsinki Corpus 以外のコーパスは、the Lampeter Corpus of Early Modern English Tracts, the Corpus of Early English Correspondence, the Helsinki Corpus of Older Scots, the Corpus of English Dialogues である。

現代英語では、かつて優勢であった *notwithstanding* はすっかり衰退し、*despite* と *in spite of* が抜きんでていることがグラフから読み取ることができる。

20 世紀後半に焦点を絞った研究もこれまでいくつかなされている。田島 (1994) は、アメリカ英語の言語資料 *Brown Corpus* (Brown) とイギリス英語の言語資料 *Lancaster-Oslo/Bergen Corpus* (LOB) を用い、1961 年における *despite* と *in spite of* の両者の使用状況を調査している<sup>2</sup>。LOB では二つ形態の頻度はほぼ同じ (*despite* 74 例、*in spite of* 79 例) だが、Brown では *despite* が *in spite of* の 2 倍も用いられている (*despite* 104 例、*in spite of* 52 例)。田島 (1994) は、両コーパスを成す 15 のジャンルに着目し、文体上の差異があるのかどうかも探っている。やや文語的と思われることのある *despite* が、アメリカ英語では、簡潔さを旨とする新聞英語で特に好まれるばかりか、どのジャンルでもよく用いられており、イギリス英語では、特に新聞英語に多いとは言えないが、どの分野でも *in spite of* とほぼ同じ程度に用いられているという結果が報告されている。

岩田 (2001) は、田島 (1994) が調査した二つのコーパスだけでなく、*Freiburg-Brown Corpus of American English* (Frown) と *Freiburg-LOB Corpus of British English* (FLOB) も利用している。Frown と FLOB は、それぞれ Brown と LOB の 1990 年代版であり、コーパスの編纂方針・構成が同じであるため、これら 4 つのコーパスを利用することで 30 年間ににおけるアメリカ英語とイギリス英語の変化を調査することができる<sup>3</sup>。1961 年から 90 年代の間の約 30 年間の推移を見ると、英米ともに、*despite* が増加傾向にあり、*in spite of* は減少傾向にあることが明らかになった<sup>4</sup>。1961 年には両形態が激しく競合していたイギリス英語においても *despite* が *in spite of* を完全に圧倒するようになっていたことが興味深い (*despite* 131 例、*in spite of* 46 例)。

これらの先行研究の報告から、*despite* の発達は 20 世紀に起こり、イギリス英語よりもアメリカ英語で先に進んだと考えられる。イギリス英語では、おそらく 1961 年以降 *despite* が勢力を伸ばし 1990 年代までに優勢な形態になったと考えられるが、アメリカ英語では Brown が扱う 1961 年より前の段階で *despite* が *in spite of* の頻度を上回っている可能性がある。しかし、先行研究で用いられているコーパスでは、*despite* が優勢になった具体的な時期がはっきりとわかっていない。Rissanen (2002) が用いた ARCHER は 20 世紀前半 (1900-1950) と 20 世紀後半 (1950-1990) という大雑把な時代区分で構成されているので 20 世紀に起こった変化の詳細が不透明であり、田島 (1994) と岩田 (2001) が利用した *Brown family* (Brown、LOB、Frown、FLOB) では 1960 年以前及び 1990 年以降の発達が不明であった。したがって、英米両変種それぞれに関して、具体的にどの時代に *despite* が勢力を伸ばし、*in spite of*

<sup>2</sup> Brown と LOB に関しては Leech et al. (2009)、梅咲 (1998) 等を参照。本稿で紹介・使用されているコーパスに関しては、Corpus Resource Database (CoRD) (<http://www.helsinki.fi/varieng/CoRD/>) に詳しい。

<sup>3</sup> Frown は 1991 年の、FLOB は 1992 年の書き言葉の資料から構成されているコーパスである。

<sup>4</sup> *despite* は、Brown 104 例から Frown 122 例、LOB 74 例から FLOB 131 例へと増加している。一方の *in spite of* は、Brown 52 例から Frown 19 例、LOB 79 例から FLOB 46 例へと減少している。

を超えるに至ったのかを、広いスパンで精査する必要があるだろう。そこで、次節では、19 世紀初頭から現代までの言語変化を詳細に辿ることを可能にするいくつかの史的コーパスを利用し、譲歩の前置詞の発達を追う。

### 3 コーパスを用いた譲歩の前置詞の調査

#### 3.1 通時的コーパスを用いた史的分析

本節では、ブリガムヤング大学の Mark Davies 教授が構築・運営しているオンラインで利用可能なコーパスを用い、譲歩の前置詞の使用の変化を詳しく見ていく。Mark Davies 教授が構築したインターフェースでは、10 年単位でデータを見ることが可能なため、言語変化を詳細に辿ることができる。まず、英米両変種の書き言葉における 1810 年以降の歴史的変遷を、Google Books コーパスを用いて俯瞰的に見ていきたい<sup>5</sup>。以下のグラフ（図 2）は、340 億語からなるイギリス英語の書き言葉のコーパスである Google Books British における譲歩の前置詞の頻度を、100 万語あたりの語数で示している。（詳しい統計的情報は Appendix を参照されたい。）

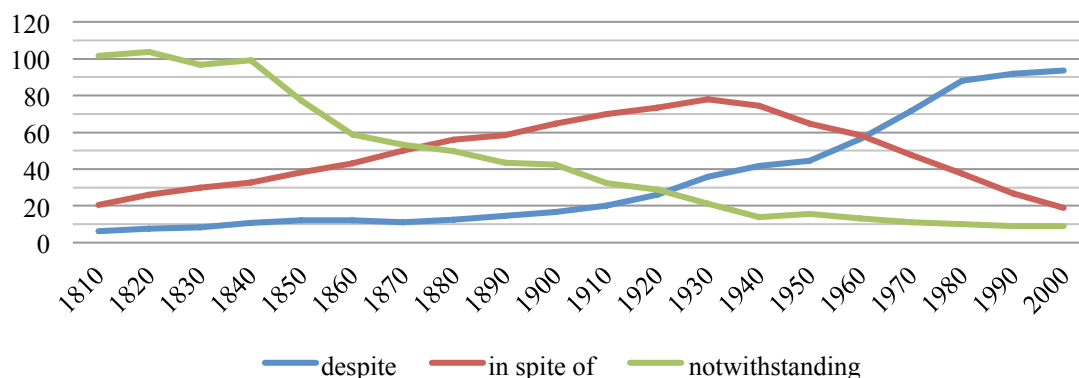


図 2. Google Books British における譲歩の前置詞（100 万語あたりの語数）

全体の傾向は Rissanen (2002) が提示した ARCHER の調査結果とほとんど一致している。20 世紀初頭までの大きな変化として、優勢であった *notwithstanding* が頻度を落とし、*in spite of* が台頭している。*despite* は 20 世紀初頭から増加の勢いを増し、1950 年代頃から 1980 年代にかけて急増した結果、現代では *in spite of* を遥かに凌いでいる。LOB と FLOB のデータから、*in spite of* の使用頻度が 1961 年以降に減少していることが推測されたが、この変化は 1930 年代頃から始まり現在に至るまで着実に進行している変化であることが見て取れる。*despite* が *in spite of* の頻度を上回る時期は、ちょうど LOB と FLOB の調査結果から予想される時期（1961 年から 1992 年の間）と合致している点が興味深い。したがって、イギリス英語の書き

<sup>5</sup> Google Books Corpus を始めとする Mark Davies 教授が構築・運営しているコーパスに関しては以下の URL を参照: <http://corpus.byu.edu/>

言葉においてはこの頃に **despite** が優勢になった可能性が高いと言えるだろう。

次に、アメリカ英語における歴史的変化を調査したい。以下のグラフ (図 3) は、1550 億語に及ぶ膨大な語数を誇る Google Books American における譲歩の前置詞の頻度の推移を示したものである。

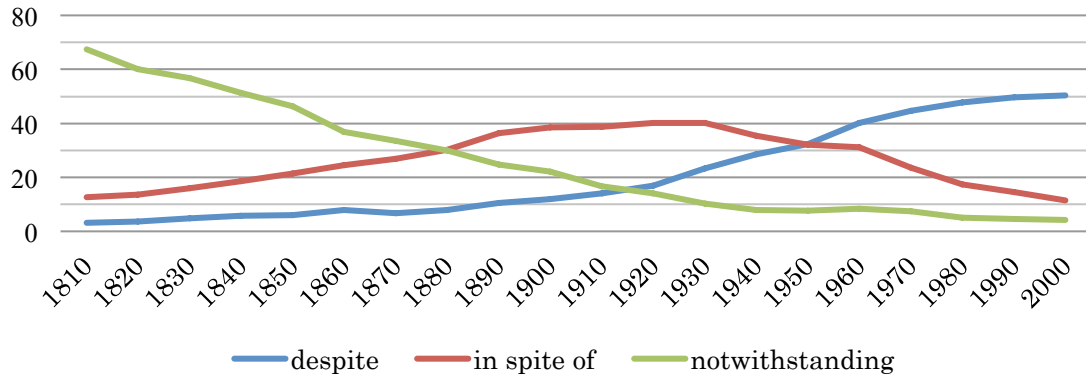


図 3. Google Books American における譲歩の前置詞 (100 万語あたりの語数)

上で見たイギリス英語のデータと大きな違いはないが、注目したいのは、**despite** の頻度が **in spite of** の頻度を上回った時期である。Brown と Frown の調査結果から形勢の逆転が起こったのは 1960 年以前であることが予想されたが、Google Books America のデータは 1950 年代には既に **despite** が僅差ではあるが優勢であったことを示唆している (**despite** 32.28 例、**in spite of** 32.08 例 (100 万語あたりの頻度))。despite の普及に関してはアメリカ英語がイギリス英語の先を行っていたという推測を支持する結果が得られた。

最後に、ランカスター大学の Paul Baker 教授がそれぞれ Brown、LOB の 2000 年代版として作成したパラレルコーパスである American English 2006 (AmE06)、British English 2006 (BE06) を用いることで、1990 年代の Frown、FLOB 以降の譲歩の前置詞の使用頻度の変遷を確認したい。これら二つのコーパスは、大部分が 2006 年の書き言葉の資料から成り立っている<sup>6</sup>。アメリカ英語のデータを示した表 1 とイギリス英語のデータを示した表 2 から明らかなように、書き言葉においては 1990 年代以降も **despite** が増加し、その一方で **in spite of** がさらに頻度を落としていく。1961 年には、イギリス英語が **despite** の導入に遅れを取っていたため、英米差が観察されたが、2000 年代には、両変種の差はほとんど消滅しているようである<sup>7</sup>。

<sup>6</sup> AmE06、BE06 に関しては Paul Baker 教授の HP を参照: <http://www.ling.lancs.ac.uk/profiles/Paul-Baker>

<sup>7</sup> カイ二乗検定 (イエーツ補正) を行った結果、1961 年と 1991/1992 年には、**despite** と **in spite of** の頻度に関して、英米間に有意水準 1% で差があったが (1961 年  $\chi^2=9.86$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ ; 1991/1992 年  $\chi^2=6.81$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )、2006 年には有意差が認められなかった (2006 年  $\chi^2=1.86$ ,  $df=1$ ,  $p=.17$ )。

表 1. アメリカ英語における despite と in spite of の使用頻度の変化 (Brown と Frown は田島 (1994)、岩田 (2001) から)

	Brown (1961)	Frown (1991)	AmE06 (2006)
despite	104 (66.7%)	122 (86.5%)	167 (86.5%)
in spite of	52 (33.3%)	19 (13.5%)	26 <sup>8</sup> (13.5%)

表 2. イギリス英語における despite と in spite of の使用頻度の変化 (LOB と FLOB は田島 (1994)、岩田 (2001) から)

	LOB (1961)	FLOB (1992)	BE06 (2006)
despite	74 (48.4%)	131 (74.0%)	170 (91.9%)
in spite of	79 (51.6%)	46 (26.0%)	15 ( 8.1%)

### 3.2 使用域別の使用状況の通時的調査

ここまで、英米両変種における譲歩の前置詞の史的発達を概観してきたが、Google Books コーパスの仕様上、使用域別の違いを調べることはできなかった。despite は全ての使用域で均等に普及していったのだろうか、それとも特定の使用域から拡散していったのだろうか。このような問いに答えるため、使用域別の使用状況を通時的に調査することができる Corpus of Historical American English (COHA) を用い、1810 年以降の変化を使用域毎に調査する。イギリス英語に関しては、COHA に対応するような史的コーパスが提供されていないため、本論では考察しない。COHA は 1810 年から 2009 年までをカバーする 4 億語のコーパスで、フィクション、雑誌、新聞、ノンフィクションの 4 つのジャンルから構成されている<sup>9</sup>。まずはジャンルを区別せず、COHA における譲歩の前置詞の使用状況を概観したい (図 4)。

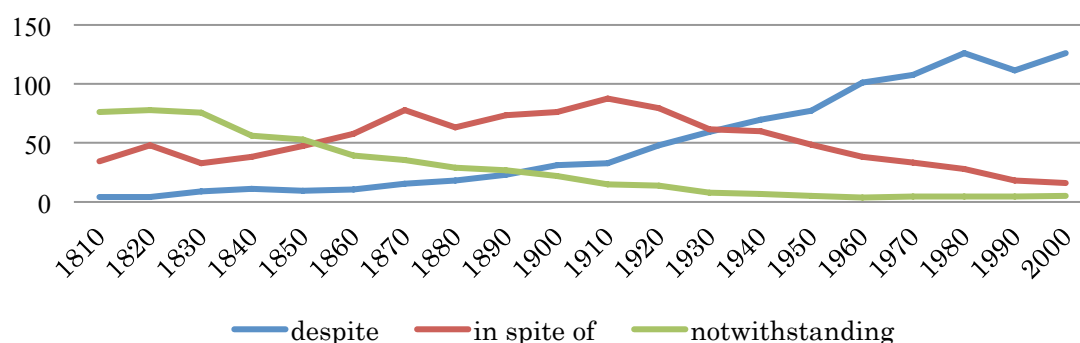


図 4. COHA における譲歩の前置詞 (100 万語あたりの語数)

<sup>8</sup> AmE06 と BE06 は著作権の関係で単語の頻度リストのみが一般に公開されているため、群前置詞である in spite of の頻度は抽出できなかった。その代わりに spite の頻度を表 1 と表 2 に載せている。spite の使用の大半は群前置詞 in spite of としての使用なので、この数字には in spite of 以外の使用例はほとんど含まれていないと思われる。参考までに、spite の全用例中の in spite of の割合は、BNC では 93.1% (2893 例中 2692 例)、COCA では 92.5% (7624 例中 7051 例) であった。

<sup>9</sup> COHA に関しては Davies (2012) を参照。

変化の全体像は Google Books America で見たものと大きく変わらないが、COHA では、より早い段階で *despite* が *in spite of* を上回っており、1930 年代に形勢の逆転が起こっている。これまでの調査結果をまとめると、アメリカ英語では 20 世紀の半ば頃までに譲歩の前置詞に関する重要な変化が起こったと推測される。

アメリカ英語では *despite* の発達は全ての使用域で均等に進んだのだろうか。以下のグラフ（図 5）は、*despite* と *in spite of* の二つの形態における *despite* の割合の変遷をジャンル毎に示したものである。

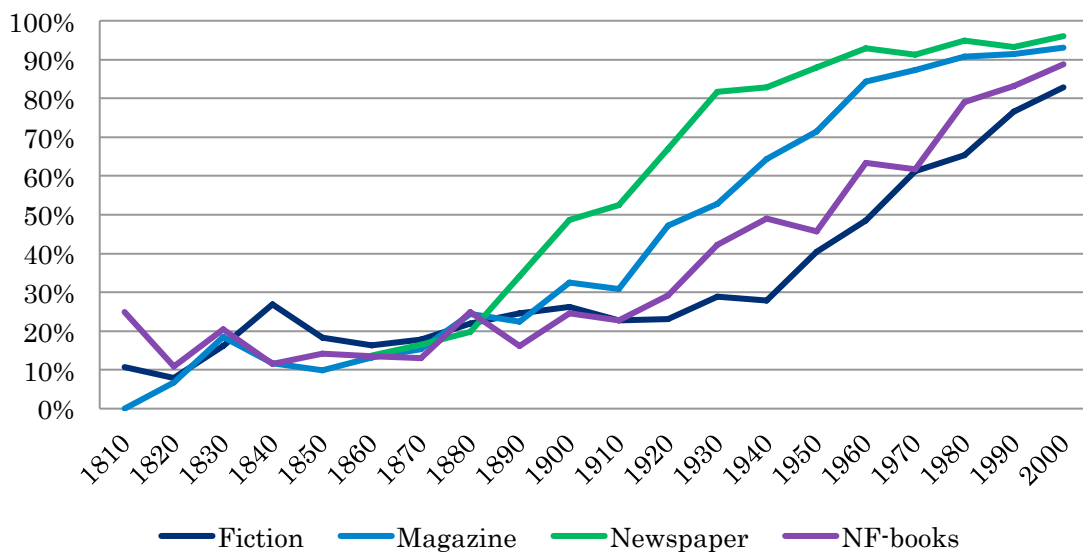


図 5. COHA における *despite* と *in spite of* の二つの形態に占める *despite* の割合

ジャンルによって *despite* の発達の時期や程度が異なることが見て取れる。最も早い時期に *despite* が全体の半数を占めるようになったジャンルは新聞であり、1890 年代以降、現在に至るまで他のどのジャンルよりも高い割合で *despite* が使用されている<sup>10</sup>。驚くべきことに、早くも 1910 年の段階で既に *despite* が優勢になっている。新聞の後には雑誌、ノンフィクション、フィクションと続く。1923 年から 2006 年までの TIME 誌の記事から成る TIME Corpus によると、TIME 誌では、1923 年の創刊時に既に *despite* が最も頻出する譲歩の前置詞であったことがわかる（図 6）。早くも 1960 年代には *despite* が全体の 90%以上を占めるに至っている。

<sup>10</sup> COHA は 1850 年代以前の新聞のデータを含んでいないため、新聞の折れ線は 1860 年代から始まっている。



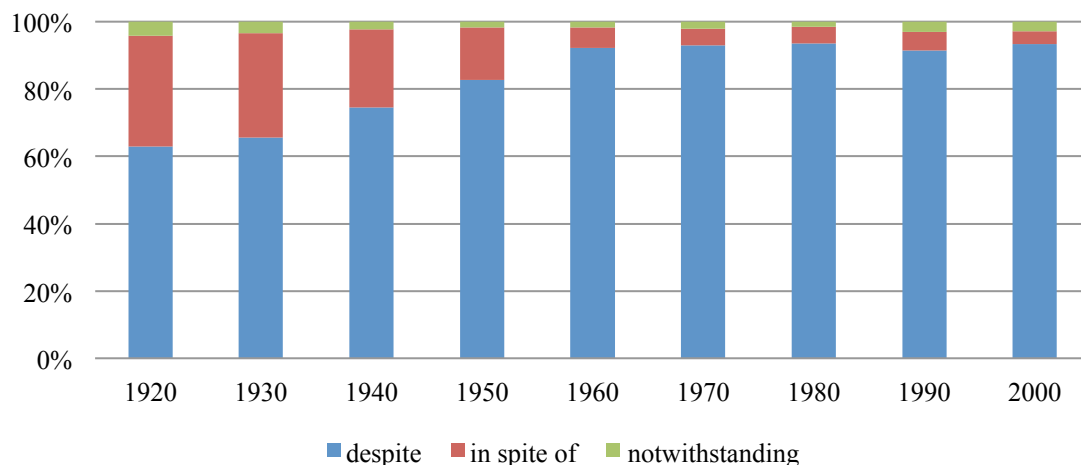


図 6. TIME corpus における三つの前置詞の割合の歴史的変遷(1920 年代から 2000 年代まで)

新聞や雑誌が他のジャンルの先を行っていることから考えると、**despite** は発達初期の段階ではジャーナリズムの分野で重用され、後に他の使用域に拡散していったと推測される。現代のアメリカ英語に関する語法書である Garner (2003) は、簡潔さ (compactness) 故に **despite** が好ましいと述べているが、**despite** の歴史的発達の背後には形態の短さが強く関係していると思われる。Rissanen (2002: 200) は **notwithstanding** の衰退の考えられる理由の一つに、形態が不便なほど長い (“inconveniently long”) ことを挙げている。**in spite of** も同様の理由で、**despite** に取って代わられたのではないだろうか。簡潔さが重んじられる新聞・雑誌において、簡潔な形態である **despite** が好まれるようになったことは自然な流れであると言える。

### 3.3 話し言葉における使用状況の分析

ここまで書き言葉に焦点を当て、過去約 200 年における譲歩の前置詞の歴史的変化を調査してきた。語法書や文法書の中には、**despite** を形式ばった語であるとしているものもあるが<sup>11</sup>、現代の口語にはどの程度浸透しているのだろうか。そこで本節では、現代英語の話し言葉のデータを含むコーパスを調査する。1980 年代から 1993 年までのイギリス英語の資料から成る British National Corpus (BNC) と 1990 年から 2012 年までのアメリカ英語の資料から成る Corpus of Contemporary American English (COCA) をここでは取り上げる<sup>12</sup>。また、2001 年から 2012 年までのソープオペラのスクリプトから成る Corpus of American Soap Operas (SOAP) も参照した。このコーパスは打ち解けた口語のアメリカ英語を知る際に有用であるという<sup>13</sup>。

<sup>11</sup> Quirk et al. (1985)、Swan (2005) 等参照。

<sup>12</sup> BNC は Mark Davies 氏が提供しているインターフェイス (BYU-BNC) を用いた。

<sup>13</sup> 詳しくは以下の URL を参照: [http://corpus2.byu.edu/soap/help/intro\\_e.asp](http://corpus2.byu.edu/soap/help/intro_e.asp)



表 3. COCA、BNC、SOAP における譲歩の前置詞 (abs=絶対数、pmw=100 万語あたりの語数、%=全体 (3 種類の前置詞) に占める割合)

		despite			in spite of			notwithstanding		
		abs	pmw	%	abs	pmw	%	abs	pmw	%
COC	Spoken	6016	62.94	84.6%	824	8.62	11.6%	271	2.84	3.8%
	Fiction	7752	85.72	77.9%	1960	21.67	19.7%	238	2.63	2.4%
	Magazine	13375	139.97	88.4%	1200	12.56	7.9%	549	5.75	3.6%
	Newspaper	14979	163.32	93.0%	671	7.32	4.2%	450	4.91	2.8%
	Academic	17197	188.84	82.8%	2396	26.31	11.5%	1174	12.89	5.7%
BNC	Spoken	220	22.08	77.7%	44	4.42	15.6%	19	1.91	6.7%
	Fiction	1447	90.95	68.4%	635	39.98	30.1%	32	2.01	1.5%
	Magazine	1238	170.48	89.5%	113	15.56	8.2%	33	4.54	2.4%
	Newspaper	2507	239.53	89.3%	284	27.13	10.1%	18	1.72	0.6%
	Non-acad	3102	188.05	83.6%	490	29.71	13.2%	118	7.15	3.2%
	Academic	2745	179.04	78.6%	454	29.61	13.0%	295	19.24	8.4%
	Misc	2878	138.13	78.6%	586	28.13	16.0%	199	9.55	5.4%
SOAP		1938	19.23	67.1%	894	8.87	30.9%	56	0.56	2.0%

他のジャンルと比べると 100 万語あたりの頻度は低いが、話し言葉においても **despite** が英米両変種において最も頻繁に使用される譲歩の前置詞であることが表 3 から読み取れる (COCA Spoken: 84.6%; BNC Spoken: 77.7%; SOAP: 67.1%)<sup>14</sup>。書き言葉、特に、新聞や学術論文 (Academic) において頻出するという点では、**despite** が形式ばった語であるという見解は妥当に思えるが、現代英語話者が **despite** に対して文語的な印象を抱いているかは疑わしい。**notwithstanding** が形式ばった語であるということは、学術論文で目立ち、話し言葉でほとんど観察されないことから明らかである。

### 3.4 語法・慣用法の調査

本節では、譲歩の前置詞の目的語の種類に焦点を当て、**despite** の拡散状況を通時的に調査する。**despite** と **in spite of** にはいくつかの語法・慣用表現がある。動名詞を目的語にとる用法、**the fact that** を目的語にとり、**although** と同義の接続詞表現として機能する用法<sup>15</sup>、「思わず」の意で使われる再帰代名詞を目的語にとる用法である。COHA を元に作成した以下の表 4 では、それぞれの用法ごとに **despite** の発達の程度を見て取ることができる。「その他」には全用例からこれら三つの用法を除いた全ての例が含まれている。(代)名詞を目的語にとる最も典型的な例がここに含まれていると想定される。

<sup>14</sup> 話し言葉では代替表現 (**but** や **although** 等) が頻用されているため、他の使用域と比べて相対的に譲歩の前置詞全般の使用頻度が低いと考えられる。話し言葉における譲歩の代替表現に関しては Barth (2000) を参照。

<sup>15</sup> いくつかの語法書・文法書はこの用法 (**despite the fact that...**、**in spite of the fact that...**) を冗長な表現としている。Quirk et al. (1985)、Swan (2005)、Evans and Evans (1957) 等参照。

表 4. COHA における目的語別に見た *despite* の使用割合 (*despite* と *in spite of* の合計における) の変遷 (括弧内は *despite* の絶対頻度)

	動名詞	the fact (that)	再帰代名詞	その他
1810	0% (0)	0% (0)	0% (0)	11% (5)
1820	50% (1)	0% (0)	0% (0)	9% (28)
1830	0% (0)	0% (0)	4% (1)	22% (122)
1840	0% (0)	100% (1)	6% (4)	24% (171)
1850	0% (0)	0% (0)	1% (1)	18% (153)
1860	0% (0)	20% (2)	2% (2)	16% (173)
1870	0% (0)	14% (2)	3% (3)	18% (279)
1880	14% (1)	36% (16)	4% (5)	24% (352)
1890	14% (1)	24% (15)	5% (6)	25% (445)
1900	50% (5)	42% (52)	5% (6)	30% (632)
1910	7% (1)	36% (59)	3% (5)	29% (682)
1920	11% (3)	42% (97)	8% (13)	39% (1115)
1930	19% (5)	57% (130)	12% (13)	50% (1319)
1940	27% (13)	68% (135)	9% (10)	55% (1537)
1950	50% (15)	62% (126)	21% (23)	63% (1740)
1960	63% (20)	68% (107)	26% (29)	75% (2270)
1970	75% (41)	82% (140)	28% (26)	78% (2345)
1980	80% (85)	74% (102)	21% (22)	84% (2972)
1990	92% (146)	86% (121)	52% (43)	86% (2805)
2000	97% (272)	89% (142)	41% (40)	89% (3272)

\*0%～19%、20%～49%、50%～79%、80%～100%の4つのグループを分類し、グループに応じてセルに色付けした。*despite* の使用割合が高いほど色が濃くなるようにしている。

発達初期の段階では、*despite* は一般的な(代)名詞や *the fact (that)* を目的語にする用法で勢力を拡大していったことがわかる。1930年代には両用法で *despite* が過半数を占めるに至っている。これらの用法より少し遅れるが、動名詞を目的語としてとる用法では、1950年代以降 *despite* が優勢になっている。この表で最も注目すべき点は、再帰代名詞を目的語にとる例では *despite* の台頭がかなり遅れている点である。1990年代には *in spite of* と拮抗する程度まで増加しているが、80%以上が *despite* の例である他の用法とは勢力関係が大きく異なる。今後、全体として *despite* がさらに力を強め、*in spite of* の生産性がますます低下していくことが予想されるが、再帰代名詞を目的語にとる用法においては *in spite of* の使用が化石的に残存するのではなかろうか。今後の展望が非常に興味深い。

#### 4 おわりに

以上、本論では、通時的・共時的コーパスを用い、譲歩の前置詞の使用の歴史的変化を調査し、現代英語における使用状況を明らかにした。書き言葉において19世紀末から20世紀初頭にかけては *in spite of* が最も頻繁に使用される譲歩の前置詞

であったが、20 世紀前半に **despite** が急速に発達した結果、同世紀後半には **despite** は **in spite of** を凌ぎ最も頻度の高い形態になっていることが判明した。この変化はアメリカ英語で先に起こり、イギリス英語が追従していったようであった。現代英語における様々な変化を調査した Leech et al. (2010) は、言語変化においてアメリカ英語がイギリス英語を先行する例を多数挙げているが、譲歩の前置詞における **despite** の増加も同様の例と見なすことができるかもしれない<sup>16</sup>。しかし、2000 年代には、20 世紀半ば頃に存在していた英米差はほとんど消滅しているようであった。また、使用域別の使用状況を通時的に調査した結果、**despite** は発達初期の段階では特に新聞や雑誌で好まれていたことが明らかになった。簡潔さが重んじられるジャーナリズムの英語で重用されていたことから、**despite** の発達の背後には形態の簡潔さが関係していると推測される。また、**despite** は文語的であると言われることがしばしばあるにもかかわらず、現代英語では書き言葉においても話し言葉においても最も一般的に使用される譲歩の前置詞であった。全体として、**despite** は様々な使用域・用法で着実に勢力を拡大していたが、再帰代名詞の目的語としては **in spite of** と拮抗関係にあることが判明した。**in spite of** の使用は、この言語的環境において化石的に残存することが推測された。

本研究の調査結果は英語教育にも示唆を与えうるものである。譲歩の前置詞を学習者に解説する際には、英米問わず現代英語において最も頻繁に使用されている **despite** を強調すべきである。**despite** は使用域にかかわらず最も頻用される形態であるから、学習者のレベルや指導方針（スピーキングやライティング等の発信型かリーディングやリスニング等の受信型か）等の要因に関係なく、重点的に扱われるべきであると考えられる。一方、**in spite of** は、**notwithstanding** と同様に、現代英語では使用される機会が非常に限られているので、発信型の英語を指導する際には取り上げる必要性はほとんどないだろう。上級学習者向けの受信型の授業で簡単に触れられる程度で十分であると思われる。

本稿が残した今後の課題としては、英米以外の英語変種における使用状況の調査、学習者コーパスにおける使用状況との比較研究、共起する名詞の意味範疇別に見た詳細な通時的調査等が挙げられる。今後、英語学・英語史・英語教育等の研究分野を越えた多角的な視点から研究を進展させたいと考えている。

---

<sup>16</sup> 詳しくは Leech et al. (2010: 252-256) を参照。

## 参考文献

## コーパス

- Davies, Mark. 2007-. *TIME Magazine Corpus: 100 million words, 1923-2006*. Available online at <http://corpus.byu.edu/time>.
- Davies, Mark. 2008-. *The Corpus of Contemporary American English (COCA): 400+ million words, 1990-present*. Available online at <http://corpus.byu.edu/coca/>.
- Davies, Mark. 2010-. *The Corpus of Historical American English (COHA): 400 million words, 1810-2009*. Available online at <http://corpus.byu.edu/coha/>.
- Davies, Mark. 2011-. *Google Books American English Corpus: 155 billion words, 1500s-2000s*. Available online at <http://googlebooks.byu.edu/>.
- Davies, Mark. 2011-. *Google Books British English Corpus: 34 million words, 1500s-2000s*. Available online at <http://googlebooks.byu.edu/>.
- Davies, Mark. *British National Corpus (BYU-BNC): 100 million words, 1980s-1993*. Available online at <http://corpus.byu.edu/bnc/>.
- Davies, Mark. 2012-. *Corpus of American Soap Operas: 100 million words, 2001-2012*. Available online at <http://corpus2.byu.edu/soap/>.

## 二次資料

- Barth, Dagmar. 2000. ““that’s true, although not really, but still”: Expressing concession in spoken English.” In Elizabeth Couper-Kuhlen and Bernd Kortmann, eds. *Cause, Condition, Concession, Contrast: Cognitive and Discourse Perspectives*. Berlin: Mouton de Gruyter. 411-437.
- Davies, Mark. 2009. “The 385+ million word *Corpus of Contemporary American English* (1990-2008+): design, architecture, and linguistic insights.” *International Journal of Corpus Linguistics* 14: 159-90.
- Davies, Mark. 2012. “Some methodological issues related to corpus-based investigations of recent syntactic changes in English.” In Terttu Nevalainen and Elizabeth Closs Traugott, eds. *The Oxford Handbook of the History of English*. Oxford: Oxford University Press. 157-174.
- Evans, Bergen and Cornelia Evans. 1957. *A Dictionary of Contemporary American Usage*. New York: Random House.
- Garner, Bryan A. 2003. *Garner’s Modern American Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- Leech, Geoffrey, Marianne Hundt, Christian Mair, and Nicholas Smith. 2009. *Change in Contemporary English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Rissanen, Matti. 2002. “Despite or notwithstanding? On the development of concessive prepositions in English.” In Andreas Fischer, Gunnel Tottie and Hans Martin Lehmann, eds. *Text Types and Corpora: Studies in Honour of Udo Fries*. Tübingen: Gunter Narr Verlag. 191–203.

Swan, Michael. 2005. *Practical English Usage*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.

岩田幸子. 2001. 「コーパスに基づく despite と in spite of の語法研究」『Athena』34: 27-42.

梅咲敦子. 1998. 「コーパスとは何か」 齊藤俊雄、中村純作、赤野一郎編『英語コーパス言語学 基礎と実践』東京: 研究社. 21-48.

田島松二. 1994. 「コンピューター・コーポラ利用による現代英米語法研究 (7) — despite と in spite of —」『英語英文学論叢』44: 125-136.

## Appendix

表 A1. Google Books British における譲歩の前置詞の頻度 (100 万語あたりの語数)

	despite	in spite of	notwithstanding
1810	6.08	20.44	101.65
1820	7.68	26.08	103.82
1830	8.46	29.88	96.56
1840	10.71	32.76	99.24
1850	12.01	38.40	77.07
1860	12.14	43.26	58.82
1870	11.16	49.94	53.36
1880	12.45	55.89	49.81
1890	14.62	58.40	43.30
1900	16.79	64.75	42.27
1910	20.29	69.86	32.22
1920	26.00	73.51	28.97
1930	35.91	77.81	21.35
1940	41.63	74.38	13.70
1950	44.50	64.70	15.75
1960	56.20	58.57	13.13
1970	71.66	47.63	11.13
1980	88.05	37.69	10.09
1990	91.92	26.86	9.09
2000	93.56	18.92	8.99

表 A2. Google Books American における譲歩の前置詞の頻度（100 万語あたりの語数）

	despite	in spite of	notwithstanding
1810	3.12	12.55	67.48
1820	3.74	13.72	60.09
1830	4.83	15.99	56.77
1840	5.66	18.66	51.27
1850	6.04	21.40	46.46
1860	7.83	24.51	36.90
1870	6.61	26.80	33.52
1880	7.95	30.15	29.91
1890	10.53	36.45	24.64
1900	11.90	38.49	22.07
1910	14.10	38.68	16.77
1920	17.04	40.14	14.16
1930	23.38	40.15	10.31
1940	28.63	35.44	7.89
1950	32.28	32.08	7.73
1960	40.26	31.18	8.43
1970	44.76	23.65	7.33
1980	47.68	17.45	5.17
1990	49.63	14.51	4.64
2000	50.40	11.40	4.23

表 A3. COHA における譲歩の前置詞の頻度 (100 万語あたりの語数)

	despite	in spite of	notwithstanding
1810	4.23	34.71	76.19
1820	4.19	48.07	77.81
1830	8.86	33.10	75.79
1840	10.97	38.38	56.45
1850	9.35	47.29	52.88
1860	10.38	57.75	39.58
1870	15.30	77.63	35.66
1880	18.41	63.10	29.29
1890	22.81	73.35	26.84
1900	31.45	76.12	21.77
1910	32.91	87.49	14.67
1920	47.87	79.52	13.64
1930	59.63	61.86	7.72
1940	69.62	60.25	6.69
1950	77.57	48.81	5.21
1960	101.22	38.16	3.75
1970	108.00	33.21	4.62
1980	126.40	28.09	4.70
1990	111.59	18.18	4.37
2000	126.25	16.06	4.94



表 A4. COHA における使用域別に見た despite と in spite of の頻度 (100 万語あたりの語数)

	Fiction		Newspaper		Magazine		NF-books	
	despite	in spite of	despite	in spite of	despite	in spite of	despite	in spite of
1810	2.54	21.16	0.00	0.00	0.00	8.47	1.69	5.08
1820	3.18	37.39	0.00	0.00	0.43	5.92	0.58	4.76
1830	4.72	24.47	0.00	0.00	1.31	5.81	0.73	2.83
1840	9.22	25.05	0.00	0.00	1.00	7.60	0.75	5.73
1850	6.44	28.72	0.00	0.00	1.21	10.93	1.27	7.65
1860	6.98	35.71	0.12	0.76	2.17	14.19	1.11	7.09
1870	9.64	44.61	0.86	4.36	2.96	16.38	1.83	12.28
1880	11.08	39.43	1.23	4.97	4.38	13.54	1.72	5.17
1890	13.25	40.78	2.67	5.15	4.81	16.65	2.09	10.78
1900	15.25	42.81	3.53	3.71	9.37	19.46	3.30	10.14
1910	13.44	45.55	4.18	3.79	1.85	26.52	3.44	11.63
1920	12.59	42.06	13.88	6.82	6.22	18.09	5.18	12.55
1930	12.88	31.83	21.05	4.71	20.65	18.41	5.04	6.91
1940	12.86	33.19	24.15	4.97	24.40	13.55	8.21	8.54
1950	16.38	24.12	24.04	3.30	28.85	11.49	8.31	9.90
1960	19.98	21.15	27.57	2.09	41.08	7.67	12.60	7.26
1970	25.91	16.42	29.43	2.81	39.34	5.71	13.31	8.27
1980	31.84	16.83	31.96	1.70	43.02	4.38	19.59	5.17
1990	31.32	9.59	23.30	1.68	42.45	3.97	14.53	2.93
2000	47.72	9.88	21.92	0.91	36.66	2.74	19.95	2.50

表 A5. TIME corpus における譲歩の前置詞の頻度

	despite	in spite of	notwithstanding
1920	81.86	42.83	5.50
1930	79.56	37.69	4.11
1940	106.44	33.20	3.24
1950	138.67	26.21	2.68
1960	195.95	12.62	3.67
1970	208.88	11.33	4.64
1980	202.25	10.55	3.17
1990	170.20	10.48	5.44
2000	146.10	5.76	4.51